

## ジル・ドゥクレール教授講演会記録

# パトリス・シェロー演出のラシーヌ悲劇 『フェードル』における剣

關 智子

パトリス・シェロー、2013年10月7日没、享年68歳。クロード・レジやピーター・ブルックなどの大御所が米寿を迎えた後も活発に創作を行っているなかで、早すぎる死、大きすぎる損失であった。今年3月に早稲田大学演劇博物館主催で行われたジル・ドゥクレール教授の講演会では、そのシェローの代表作であるラシーヌ悲劇『フェードル』(Phèdre, 2003)が取り上げられた。DVDの映像を見ながら、シェローの独創性を指摘し、さらには現代演劇における古典戯曲の読み直しの意味を問う、鋭く奥深い議論だった。本稿はそのまとめである。

講演は演劇的記号の確認から始まった。演劇的な記号は、舞台のイメージと演劇的イメージの二つに大きく分けることができる。舞台のイメージは、舞台上で示されている内容であり、演劇的イメージは言葉によって観客の内に想起させられる新たなイメージである。ラシーヌが『フェードル』を書いた17世紀のフランス古典主義においては、観客の演劇的イマジネールの力が強く、ギリシャ悲劇やラテン悲劇を書き直すことが前提となっていた。ラテン劇よりはギリシャ劇の方が模倣すべき手本とみなされていたが、ラシーヌはセネカの『パエドラ』を作品のなかに取り入れつつ、新たなエウリピデスとなることを試みた。

シェローがもっとも興味を持ったのはそのラシーヌ劇における古代悲劇との緊張関係である。彼はフランス古典主義の形式主義的な礼節や適合性を取り去り、その下にあるものを明るみに出すための道具として、抜き身の剣を舞台上に持ち出した。それは切っ先を引きずらないようにするためには常に誰かに向けていなければならない、極めて危険なマテリアルである。

剣は、舞台上の具体的な物質という意味においては舞台のイメージに属すと同時に、台詞としても「剣」という言葉が語られるために、演劇的イメージにも属している。この剣はやがて持ち主から自立して脅威を持つようになり、登場人物たちはそのことに対して恐怖する。また、イポリットがフェードルに剣を向けるシーンでは、闘牛の剣のイメージを持ち出し、彼女がミノタウロスの娘であるという事実を暗示することで神話の時間を挿入している。このように『フェードル』における剣は単なる武器としてではなく、複層的な時間とイメージを喚起させ、ラシーヌ作品の深層部に描かれた暴力性を炙り出すものとして提示されているのである。

以上のような上演における暴力性の描写は、シェローはラシーヌを裏切ったのか、という問いを喚起する。結論から言えばこれは裏切りではない。シェローはラシーヌ作品における隠された暴力性を浮かび上がらせたのである。ラシーヌ劇における暴力性を証明し得るのはまず、台詞における内的上演指示である。ラシーヌは上演指示を登場人物の台詞のなかに織り込んでおり、台詞によって指示される暴力的な行為は舞台上においてなされ、舞台のイメージとなるよう示している。次に「エノーヌの抽象」と呼び得るものもまた暴力性を証明する。登場人物のエノーヌは、「剣」を持った「腕が振り上げられた」と語るが、それが誰の腕であるのかを曖昧なままにする。観客は、この「剣」という象徴的な言葉によって暴力性のイメージを演劇的イメージとして受け取り、またその剣の持ち主がイポリットとフェードルのどちらでもあり得ることから、暴力性のイメージを両義的なものとして認識するのである。

この両義性は、シェロー作品がある種のパラ

ンプセスト palimpseste であることを明らかにする。パランプセプトとは、羊皮紙に文字を書く際に文字を削り取ってさらに新たに書き直すため、様々なテキストが層になって重なっている様子を意味する。剣を持った腕がイポリットのものである場合、それはラシーヌではなくセネカ作品において描かれていたシーンである。またフェードルのものである場合はシェローのオリジナルということになる。シェローはこのような複層的なイメージを喚起することで、『フェードル』という作品が神話から、エウリピデス、セネカ、ラシーヌ、そしてシェローによって次々に書き直され、そして本作品はその歴史が刻み込まれたものであることを示しているのである。

以上のことから、シェローの『フェードル』に見られる独創的な美学は、ラシーヌの『フェードル』における美学と重なり合うものであるとドゥクレール教授は語った。シェローの『フェードル』

における暴力性は無根拠なものではない。『フェードル』の最後では、テゼーが血を顔に塗る。それはある種の演劇の仮面を作る行為であり、観客は古代悲劇の形式を目の当たりにするのである。

#### ＜講演者プロフィール＞

ジル・ドゥクレール (Gilles Declercq)

1956年生まれ。現在、パリ第3大学教授。同大学演劇研究所長。専門は17世紀修辞学、演劇史。「情念と演劇性」、「ラシーヌにおけるレトリック性と演劇性」といった論考を発表し、近年は舞台芸術における演出美学に関する研究に取り組み、パトリス・シェローやダニエル・メスギッシュといった演出家の舞台に関して、「古典の読み直し」という面からの考察を精力的に行っている。

著作に *Iconographie théâtrale et Genres dramatiques* (2008)、*Pascal Quignard ou la littérature démembrée par les muses* (2011)、*Reprise et Transmission. Autour du travail théâtral de Daniel Mesguich* (2012) など。